

スラウェシ市民通信(1) -- アバンダの運命のボール (連載)

著者	Aan Mansyur, 松井 和久[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	138
ページ	52-55
発行年	2007-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005290

アバンダの運命のボール

アアン・マンシユール

機内では、スチュウーデスが飴袋を持ってやってきた。一席ずつ訪ね、「飴は無料よ。飛行機に乗ると耳が痛くなるでしょ。そうならないようにたくさんめるのよ」と言いながら乗客へ飴を勧める。窓側に座るアバンダがたくさん飴を取ると、スチュウーデスは大きく微笑んだ。アバンダはあ

たふたして、礼をするのを忘れてしまった。それまで、通り過ぎる車から洗剤の青いケースに小銭を落としてくれたときには、決して礼を忘れたことはなかったのに。

アバンダは緊張して飛行機の座席に座っていた。マカッサル・サッカー学校(MFS)所属の一四人の子供たちは、ジャカルタで開催される二〇〇五年国内選抜大会に出場する。出発前の空港待合室では、高級携帯電話を持つ着飾った両親から小遣いをもらう仲間たちをよそに、最も貧しいアバンダは一銭もお金を持っていなかった。

その日、暑い陽射しを受けながら、アバンダの母は、息子を空港へ見送ることなく、いつもどおり、祖母や兄弟たちと一緒に大モスク通りの交差点に立って、赤信号で停まった車の窓に手のひらを差し出していた。

アバンダら一行を乗せた車がその交差点を通り過ぎるとき、彼は同乗の親友ヘルリに「あれが僕のお母さんだよ」と指差した。ヘルリとは、自分や家族のことを隠し立てする必要がないぐらい親しいのだ。

アバンダは母や祖母に「空港へ見送りに来て欲しい」と言い出せなかった。もちろん見送ろうなどと誰も思わなかった。ハンセン病に冒された手足を見せるのが恥ずかしかったのである。夜明けに家を出るとき、か細い祖母の体は震え、兄弟はアバンダの姿が見えなくなるまで遠くで立ち続けていた。アバンダは胸がいっぱいになった。

その朝はいつもと違っていた。いつもは祖母がアバンダを起こして用意をし、汚れたボロ着を着て、大モスク通りの仕事場へ向かうのだが、この日、祖母はアバンダをMFSへ送る車を待った。おかげで、仕事に出かけるのが遅くなった。アバンダの祖母や母にとって、物乞いは唯一の職業である。他に仕事があれば、物乞いなどやらないのだが、ハンセン病のせいで、選択肢のない厳しい運命に置かれてしまったのだ。

●ハンセン病に運命を定められた家族

マカッサル市は一九七〇年代からハンセン病患者を対象とした隔離地区を定めたが、アバンダはその家族の一員として一九九四年四月二三日に生まれた。アバンダの母は感情の起伏が激しい女性だった。以前、アバンダが母の左肩の刺青について尋ねると、激しく怒り、答えようとしなかった。母は酒に溺れ、他の家族のように徐々に手足がハンセン病に蝕まれていった。

生後一カ月で、アバンダは物乞いになった。満五歳の姉が彼を背負い、ペテペテ(マカッサル市内を走る乗合自動車—訳注)の窓から窓を叩いて、同情を買おうとした。それ以来、雨の日も晴れの日も、物乞いに出るアバンダには同じことになった。そのせいで皮膚は黒光りするほど焼けた。家でアチヨと呼ばれ、学校の名簿ではムハツマド・ヌールという名前だが、サッカー選手になる夢を持ったストリート・チルドレンの彼は、地元サッカーチームのPSMに所属する、同じように皮膚の黒い選手の手

名をとって「アバンダ」と名乗った。

アバンダは五人兄弟の二番目で、幼い頃から祖母と暮らしていた。この祖母は実際には年配の伯母に当たるのだが、三度の結婚でも彼女に子供ができなかったため、年老いてからアバンダを養子に迎えた。

アバンダの両親は喧嘩が絶えず、浪費癖の母には貯金がなかった。たった一つの持ち家を売り、住むのに適さない小さい家を借りた。ハンセン病患者が住むこの地区は、都市化が進んだ今では大学生寮のすぐそばに位置する。一般の住民と交流することで、アバンダの家族は少しずつ自信を取り戻している。しかし、彼らの手足を見て唾を吐く人も少なくない。家族の人生について聞かれたアバンダは、「うちの家族はひどい運命を背負ったゴミ箱だと思う」と涙を浮かべた。学校へ上がる前、アバンダは毎日朝から夜一時まで大モスクの近くで物乞いをした。この大モスクは近年、ユスフ・カラ副大統領が寄附した一五億ルピアの資金を使ってきれいに改修された。小学校に入ってから、夕方から夜まで祖母と一緒に物乞いをした。小学校の制服を着たまま仕事に向かい、祖母が持ってきた服に仕事場で着替えて物乞いをするのだ。

アバンダは夕方、サッカーボールを蹴って遊ぶ子供たちをよく眺めていたが、彼らのように自分がボールで遊べるとは思ってもなかった。物乞いの場所では、MFSのメンバーが練習の後に迎えの父親の車で

帰っていくのを見たが、まさか自分がMFSに入るとは夢にも思わなかった。

MFSへ入るには入会金が五〇万ルピア、月謝が二万五〇〇〇ルピアかかる。それはアバンダにとってあまりに高額だった。彼が一日に稼げる額はせいぜい一万ルピアである。その一部は学校の月謝支払のためにとっておき、一部は祖母の借金返済の足しにする。祖母は前に病気になったとき、葉代として七五万ルピアを借金したが、病気が治ってからその三倍の額を返済する必要に迫られた。祖母の借金返済を助けるために、アバンダは学校が終わった後も物乞いをする必要がなくなる。「物乞いをするのは恥ずかしいけど、おばあちゃんの借金がたくさんあるし」と彼は言う。

●親友と一緒にMFSへ

二〇〇四年十二月、アバンダはヘルリと一緒にMFSに入った。しかし、なぜアバンダはMFSに入れたのだろうか。

ヘルリは親友のアバンダが一緒になければMFSへ入りたくなかった。もちろん、アバンダは五〇万ルピアの入会金を用意できるはずがない。ヘルリは州議会議員である父親にアバンダの分も負担するように頼んで、支払ってもらったのである。

小学校時代から、二人は親友だった。ヘルリは何不自由なく暮らせる裕福な家庭の子供であり、アバンダは物乞いである。アバンダはヘルリのおかげで、自分よりも境

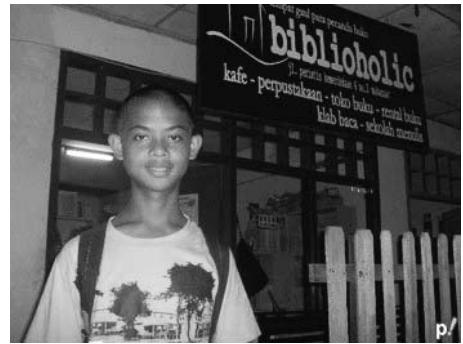
遇のいい子供たちと交われるという自信をつけた。実際、級友の多くは、ストリート・チルドレンだという理由でアバンダを蔑視した。「でも、ヘルリは他の子とは違うんだ。僕が物乞いで家族がハンセン病患者だって分かって、ヘルリは親友になりたいて言ってくれたんだよ」とアバンダは言う。

初めてMFSに合流したとき、アバンダが大モスク通りで見かける物乞いだとヘルリ以外に知る者はいなかった。アバンダとヘルリはジャカルタで開かれる二〇〇五年国内選抜大会への参加メンバー選考に臨んだ。物乞いという厳しい生活のおかげで、アバンダの体力は申し分なかった。アバンダもヘルリも合格し、身長が高いアバンダはゴールキーパーに起用された。

参加メンバーの選考が終わり、メンバーの情報確認のとき、MFS幹部はアバンダの情報がないことに気づいた。そして、ヘルリの父親のおかげで、アバンダが入会金を払わずに「裏口で」入ったことを知った。アバンダの練習の様子を見ていたMFSの監督はアバンダに近づいた。アバンダは、正式登録していないことがばれて練習ができなくなると思い、泣いた。アバンダは監督に対して、自分の境遇をすべて話した。厳しい姿勢で知られる監督はその話に心を打たれ、アバンダにMFSへの入会と二〇〇五年国内選抜大会への参加を許可した。ジャカルタで試合ができると知って、ア



アバンダが練習するカレボシ広場 (Muh Basrul Haq 撮影)



アバンダの元気な顔 (Muh Basrul Haq 撮影)

●監督の養子に

バンダは喜び、絶対にゴールを守ると約束した。彼はプレー中には激しさを前面に出すが、実は、恥ずかしがり屋なのである。

二〇〇五年六月二十六日、ジャカルタでの国内選抜大会決勝戦で、アバンダらMFSは東ジャワ・チームを一对〇で破って優勝した。これで、MFSはフランスのリヨンで開催される世界大会へ出場することになった。もちろん、アバンダは自分がフランスへ行けるとは全く思っていなかった。

ジャカルタから戻ると、アバンダは益々フランスへ行くということが信じられなくなった。フランスがどこにあるかさえ分からないのだ。祖母は、アバンダがフランスへ行くと聞いてとても喜んだ。

アバンダは優勝盾と三〇万ルピアの賞金を家に持って帰り、賞金は祖母、母、兄弟たちで分けた。サッカーの練習の賜物である賞金を分けてもらう際、「アバンダが物乞い以外で稼いだ初めてのお金なのよ」と言って、祖母は取り乱して泣いた。実はそのお金は優勝賞金ではなかった。国内選抜大会実行委員会は賞金を用意していなかった。MFSの監督が自分のポケットマネーからボーナスとして選手に渡したものであった。

ゴールキーパーのアバンダは、国内選抜大会で一点も相手に入れさせなかった。そして、彼のサッカーへの熱意に打たれた監督は、アバンダを養子として迎えることにした。ジャカルタから戻った後、アバンダは祖母に生活費と教育費は監督が払ってくれることを知らせた。祖母にはアバンダの運命の好転を拒否する理由はなかった。このとき以来、アバンダが祖母と一緒に大モスク通りに立つことはなくなった。

アバンダは毎日、フランス大会へ向けて練習に励んだ。フランスへ行くという夢を手放したくなかった。練習が終わると、地元サッカーチームのPSMの選手たちの練習風景を見ていた。そしていつかはPSMの選手になるという気持ちが強くなった。

MFSの監督は、世界五強に入ることを目標とした。前年と同じ目標だが、そのときは三二チーム中二六位だった。ゴールキーパーのアバンダは責任重大と感じ、「何としてでも優勝したい」と考えていた。

二〇〇五年八月二十八日、MFS選手団はジャカルタ国際空港からフランスへ向けて出発した。アバンダは飛行機のなかで眠れず、喜びを抑えられなかった。そして愛する人々の顔を一人一人思い浮かべた。祖母、母、兄弟たち、大モスク通りや家の近所の友人たち。「成功者になるのよ!」。心のなかで祖母の言葉を繰り返した。

●フランスでプレーして

インドネシアから一万一五八〇キロメートル離れたフランス・リヨンの競技場で、二〇〇五年九月五日、アバンダは三三カ国

から参加した同年齢の子供たちとともに世界大会の閉会式に臨んでいた。一生忘れられない出来事になった。生まれて初めて、「本当に自分も子供なのだ」と感じた。MFSに入り、国家の栄光を担ってサッカーをする前は、自分を「大人になることを強制された子供」と感じていた。食べるためにお金を探し、学校へ行くために自分で稼ぐ。アバンダはこの大会を思う存分に楽しんだ。自分にまわりついてきた人生の苦しみをすべて忘れてしまうかのように。

世界五強に入るという目標は達成できなかったが、オランダ、イタリア、フランス、アイランドなど強豪を破ったことにアバンダは満足した。そしてMFSが最少失点チームとなったことで、コーチに頭をなでてもらったのがとても嬉しかった。

現在に至るまで、アバンダはフランスでプレーできた喜びを朗々と話してくれる。自分の住むハンセン病患者地区では、あたかも戦争で勝利した帰還兵のように、彼は英雄として住民に迎え入れられた。

アバンダの祖母は、彼の活躍を家族がこれまでで得た最大の幸せと感じている。彼女はひび割れた指を眺めながら、アバンダを誇りに思う。そして、「運命って変えることができるのね。一生懸命がんばろうとしてる限り!」と何度も繰り返した。物乞いとして、彼女は自分の運命を嘆いたことはないが、「もし私を家の使用人として雇いたいという人がいるなら、もちろん道



大モスク通りの交差点 (松井和久撮影)

路なんか下りたくない」と語った。

祖母の家の片隅にある小さなテーブルの上に、アバンダがフランスでもらった銀色の盾が飾られている。その上にはアバンダがMFSのメンバーと一緒に写った写真が、額なしのまま、くすんだ壁に貼られていた。

●家族を幸せにするために

二〇〇六年四月のある日。学校から帰ると、アバンダは昼食を食べ、制服を着替える。彼はもう急いでそれらをする必要がない。今は、MFSの本部があるカレボシ広場の西南角にある監督の家に住んでいるからだ。二〇〇〇年八月二三日に設立されたMFSがアバンダの居場所になった。MFSの練習場で芝刈りをしてくれる初老の男性の部屋の右隣の小さな部屋がアバンダの部屋である。この部屋で、彼はゆっくりと練習の疲れを癒すことができる。

MFSの名前の入った青いユニフォームに着替えて、アバンダは練習場に入り、ボールを追う。裕福な家庭の子が多い他のメンバーと一緒にいても引け目を感じることにはもはやない。練習場では、ランニングやドリブルなど、コーチから指示された練習メニューをアバンダがリードする。彼はサッカーに益々のめり込んでいるように見える。今では毎日、彼はジャカルタでの国内選抜大会に再び出場するために懸命に練習している。今年もフランスへ行き、優勝したいと思っている。尊敬するマンチェスター・ユナイテッドのリオ・フェルディナンド選手のようになりたいと思っている。アバンダは幸運だった。現在、MFSメンバーは四〇〇人、彼は再び国内選抜大会の代表メンバーに選ばれた。今ではサッカーの練習に集中でき、食べるためや学費のために路上でお金を乞う必要はない。

監督の支援で、彼は現在、市内の有名中学校の一年生に籍を置く。練習後、部屋に戻ってタオルを取り、マンデイ（水浴）をする。そして学校の宿題に取り掛かる。同じ日の夕暮れどき、祖母は大モスク通りに停まっているペテペテの合間を歩きながら物乞いをしていた。母と兄弟は、他のハンセン病患者の家々の間にある借家についたばかりの小さな小屋で、夕飯を食べながら監視をしていた。この小さな小屋を建てるのに隣家から借金をしたが、その三倍の額を返済しなければならぬのだ。

その夜、アバンダの末妹は、ハサヌディン大学の第二正門前の交差点で道行く車に手のひらを差し出していた。一カ月経たぬ間に彼女は新しい仕事場へ移ってきた。アバンダの姉は、部屋で子供を寝かしつけている。彼女は酒好きの男と結婚したが、子供が産まれて二カ月で夫と離婚した。

その頃、カレボシ広場の片隅で、アバンダはちょうど定期練習を終えたところだった。「立派なサッカー選手になって、家族を幸せにするんだ」という夢を実現するために、彼は毎日一生懸命に練習している。

訳者による解説

筆者のアアン・マンシユールは、マカッサル在住の若手詩人である。彼の作品は、国内有力日刊紙『コンパス』に掲載されたり、地元ラジオ局で本人自身が朗読したりしている。本連載のもとになるサイト『バニクル』へ投稿する常連の一人である。

いまだに日本でもハンセン病患者に対する差別意識は根強いが、インドネシアでは、ハンセン病患者に限らず障害者全般に対する行政側の配慮の低さ、恵まれた層による蔑視、そしてハンセン病患者自身が人間としての尊厳を維持できないような状況を運命として受け入れている現状がある。一方、ハンセン病患者地区が周りの居住区から完全に隔離されていないため、地元住民レベルで交流がある。徹底的な隔離政策を採れない行政能力の低さのおかげでもある。

二〇〇六年一〇月、マカッサル市政府は一斉に路上物乞いの検挙に乗り出した。物乞いに金銭を施すことは彼らの自立を妨げるという大義名分に加えて、市街地の美化を乱すというのが理由である。検挙の結果、二〇〇七年一月前半時点で、市内の物乞いの数は大幅に減少し、大モスク通りで見かけたのは一人だった。ただ、それがアバンダの祖母かどうかは確認していない。

(まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員)

(Aan Mansur／詩人)